

## 第1回神奈川県生物多様性一次地域戦略検討委員会

日 時：平成26年2月5日（水）9：30～12：10

場 所：県民活動サポートセンター3階304会議室

出席者：東京農工大学 亀山 章 名誉教授  
日本大学 大澤 啓志 准教授  
株式会社野生動物保護管理事務所 羽澄 俊裕 代表取締役  
神奈川県自然保護協会 青砥 航次 副理事長  
相模原市立博物館 秋山 幸也 学芸員  
横須賀市自然・人文博物館 内船 俊樹 学芸員  
生命の星・地球博物館 勝山 輝男 専門学芸員  
水産課 勝呂 尚之  
水産技術センター 工藤 孝浩  
自然環境保全課 山根 正伸 副課長  
（慶應義塾大学 一ノ瀬友博教授、丹沢自然保護協会 中村道也理事長は欠席）  
事務局：神奈川県 環境農政局 水・緑部 自然環境保全課

### 【協議内容】

事務局からこれまでの取組をふりかえったうえで、一次地域戦略の基本的考え方及び本委員会のテーマについて説明。

委員長：市民アンケートの集計数が約200件ということだが、回答者はどういった人なのか。

事務局：県のホームページにアンケート募集のサイトを作り集計したものであり、サイトを見て気づいた人たちということになる。

委員長：自然保護団体には周知をしたのか。特定の人たちを対象にということではなく広く一般の人たちから募集したということか。

事務局：アンケート募集のチラシを県の出先機関等で配架したり、丹沢ボラネットを活用して情報を流したりして周知を図った。

委員長：質問項目は他にもあるのか。

事務局：他にも質問項目はあるが、さわりとして情報提供させていただいた。これ以外の集計結果については次回以降の委員会で適宜、情報提供したい。

委員長：一次戦略と銘打って作っているのはおそらく全国的にも初めてではないか。これは一定の年数毎に戦略を作り続けるということ、ある意味画期的なことではないかと思う。なかなかよい考え方ではないかと思う。

事務局：事業期間を長めにしてしまうと、どうしても弛みがちになるし、一次戦略としては方向性の整理というところに軸足を置いているため、国家戦略等にあわせ短めの5年という期間を設定している。

委員長：通常だと50年とか100年とかの長期計画、20年程度の中期計画、5年程度の短期計画という形で作られているが、短く切って作り続けるというのは割と大事なことではないかと思う。他に質問はないか。

委員：平成23年度に前身の委員会で提言をまとめ、県に提出されているわけだが、結局、予算も人も大してついておらず厳しい状況は変わっていない。この先、このような状況を打開する見通しはあるのか。

課長：策定プロセスは様々だが、他の都道府県の戦略策定も進みつつある。まずベースとなるものを作らないといけないという意味合いもこめて一次戦略と呼んでいる。神奈川みどり計画は10年で取組んでいるが、継承させる生物多様性地域戦略の最初のステップとしてベースを作るという点では

多少長いため5年としている。先ほどの説明にもあったが、まずは生物多様性を浸透させていかなければならない。国家戦略では各省庁の取組をとりまとめたような形になっているが、行政として生物多様性だけのカテゴリーとして予算を取ることはなかなか困難なので、まずは戦略を作っていくと、戦略策定の必要性については県としても認識したということである。市町村や企業等、多様なセクターで取組が進められているが、社会とのおりあいのつけ方の整理も含めて、みどり計画を引き継いだうえでまずはとっかかりとして戦略を作っていくということである。

委員長：委員の質問は取組が足踏み状態ではないかということかと思うが、財政サイドも含めて庁内での理解が進んでいないので提言を作って、まずは戦略を作っていくという庁内調整をしたうえで本日の委員会があるということであり、少しずつだが前に向かって進んでいる。

委員：みどり計画との関連性については説明いただいたが、丹沢大山の自然再生計画や水源施策との関連性はどうなのか。県としてこれら関連する個別計画の上位に生物多様性戦略を据えることを考えているのか、それともあくまでも関連計画と調整をしながらということになるのか。1次、2次と戦略は改訂されていくにしても、関連計画との調整が不十分で戦略だけが空回りというのでは意味がない。

課長：関連する計画としては県の総合計画や当課が所管している丹沢大山自然再生計画やアライグマ防除計画、鳥獣保護管理計画などがあるが、個別の計画がどこかにぶらさがっているかと言われれば必ずしもそうではなく、戦略にこれらの計画をぶらさげていくかどうかの議論はしていないのが正直なところだ。個別の計画の上位に戦略を据えるというのはなかなか難しいかと思うが、庁内会議もあるので関連計画とは調整していくことになる。また、その辺のあり方についても本委員会で議論していただければと考えている。

委員長：その辺が戦略のよいところとも言えるところで、法定計画であればその他の計画ときちんとした摺り合せをしなければならないし、決められているところも多いが、戦略は他の計画との縛りが少ないという良さがあるところだと思う。

委員：それだと精神的なものであって実効性のあるものにはならないのではないかと。

課長：当課は自然環境保全という一つの括りで業務を進めているが、生物多様性は当課だけに留まるものではなく、行政も超えた非常に広いテーマである。それを踏まえたうえで県戦略として何ができるかというのは難しいが、実効性を持たせるためにどうしたらよいかという視点でご意見、ご提案をしていただければ考える。

委員：相模原市でも戦略策定に向けた動きが起こりつつあり、その会議ではCOP10が開催されたことでもあるし生物多様性を前面に押し出して行けるかなと考えていたが、みどりに関する計画を大事に育ててきた所属からは戸惑いの声も聞かれる。そういう点では神奈川みどり計画の後継に据えるということはよい考えではないか。

委員長：例えば東京都では一応、戦略を作ったことになっていて、それを足掛かりにして自然環境保全条例の改正につなげようとしている。改正内容は開発規制の強化だが、その中に生態系評価を組み込んでしまおうとしている。というように戦略自体に実効性を持たせなくても、これを足掛かりに実効性のある取組につなげていくことはできる。まずは最初のステップとして基盤をしっかり固めたうえで条例改正なり施策につなげていくということが大事ではないか。みどり計画の後継ということはある意味、緑の基本計画に相当すると考えられる。制度上、上位計画にはならないが、市町村が策定する法定計画である緑の基本計画に一定の影響を与えるものにはなり得る。そういう点でもみどり計画の後継計画とされたことは非常に大きな意味を持っており、よく考えられているのではないかと思う。

委員：取巻く状況が厳しいなかで色々と考えられているという点は理解した。大事なことはここでどういったことが話し合われ、どういう方向性を模索しているのかを広く情報発信することではないか。そうした情報発信により様々な場所で壁にぶつかりながらも活動している団体を勇気付け、社会の声として大きくなることにつながるのではないかと。

委員長：神奈川県は幸いなことに博物館が多くあり、地域の自然の情報を沢山持っており、戦略を考えて行くうえではよいことだと思う。丹沢でも丁寧な調査を積み重ねられており、そうしたよい経験を持っているということはあると思う。戦略策定に向けたロードマップと本委員会で整理する議

題については委員のみなさんは了解されたようなので次に進めることとしたい。

事務局から一次戦略の骨格イメージ・本県の特徴など、他の自治体の事例・本県の関連計画、基本理念等の事務局（案）について説明。

委員長：人口予測だが、外国人の流入についても加味されたものなのか。外国人の流入を加味した場合、急激な人口減少とは違った局面が出てくる可能性もあるのではないか。

事務局：記憶では現状の社会像を踏まえ、外国人も含めた人口予測になっていると思う。

委員：昨日、福島県に行っていたが、汚染地域の現状は、人口の減少した地域で野生鳥獣の動向がどうなるかを暗示している。日本の中山間地域の20～30年後の姿はまさにあのようになる。耕作放棄地が溢れかえり、昼間からイノシシが闊歩し、残された住宅地にはドブネズミ、クマネズミが溢れかえっている。餌要因もあるが、かなり大変な状況になっており。汚染地域以外でも昼間からクマが出没し、人身事故（死亡事故含む）も発生している。そうした状況は地域にとっては災害に匹敵し、県はこうした課題に向き合わざるを得なくなっている。神奈川県の場合、人口が残っていくゾーンはあると思うのでそうした危機感はあまりないと思うが、この指針については、生物多様性保全をベースとして作っていくことは当然だが、農林業や生活環境への被害に対する観点も踏まえる必要があるのではないか。東北の現状を見ているとクマが人の生活圏に出てくるのも時間の問題と思われる。そういうことも視野に入れたうえで人と自然との共生の形をどのように築いていくかを考えることが大切である。生物多様性保全のランドデザインをエコシステムマネジメントの考え方をベースにすることには賛成だが、エコシステムマネジメント自体、そこに暮らす地域の人々の生活像という視点も入れたデザインでないと、地域から浮いたものにしかならない。

委員長：事務局の説明からはそうした悪夢のような危機感といったものを感じさせるものにはなっていないですね。予測は困難だが、アライグマとかタイワンリスだらけとか、そうした悪夢のような可能性に対してどうしたらよいですかね。手をこまねいていれば、そうした酷い状況になることは間違いないですし。

課長：鳥獣被害等に対する危機感を持っており、丹沢におけるシカについては保護管理の一貫として個体数調整ということで取組んでおり、植生の回復が見られる場所も一部出てきており、山の状況を見ながら委員の意見を聞きながら取組を進めていきたい。農林業被害等については市町村との連携が重要と考えており、来年度については強化していきたいと考えている。鳥獣被害対策はアライグマなど外来種のみならず他の鳥獣も含めて被害対策を打っていこうと考えている。特に県西地域においては耕作放棄地が増え藪化し、そこが獣の通り道になってしまうことが推測される。鳥獣対策は地域が対応することが重要になるため、捕獲も含めて地域で活動できる人材の育成も含め総合的に対策を打っていこうと考えている。

委員：ランドデザインを考える際に、リスク管理の視点からのゾーニング（棲み分け）という考え方があると思うので、その点を考慮してほしい。また、下位計画での話になるかもしれないが、例えば都市部からはこうした動物は排除するというのもランドデザインを考えるうえでは視野に入れておいてほしい。

課長：鳥獣との関係においては人の生活圏との棲み分けという方向を向いて取組んでいる。一方、都市部で顕著な特定外来生物のアライグマなどについては排除という考え方で取組んでいる。棲み分けについては山と里をどこで線引きしていくのが課題かと考えている。

委員長：東京都ではアライグマがトウキョウサンショウウオを食べてしまうことが大きな問題になっており、相当な圧力になっている。野生生物にとって外来生物が非常に大きなインパクトになっているということも考えていかなければならない。鳥獣被害対策というと多様性とは別の話のように捉えられがちだが、丹沢でもシカが希少植物を食べてしまうということもあるし、人にとってどうかだけではなく生態系全体の保全にとってどうかという視点で物事を考える必要があり、鳥獣被害を分けて議論しないほうがよいということだと思う。

委員：提言における戦略のイメージでは景観域を横断する行動計画として外来種対策等が挙げられており、鳥獣対策についてはこうした取組に包含されているというイメージを持っていたが、基本理念

等では表記されていないので表記が必要かと考える。また、人口減少など時代の変化に応じた人と自然の関係についても基本理念等に盛り込んでいくことが必要ではないかと考える。

委員長：獣害やヤマビルなどにより人口動態にさえ影響を与えている可能性が考えられる。

委員：ツキノワグマなど数が少ない一方で被害が隔年で起きているので、しっかりと棲み分けをしたり、多様性保全の観点から山を保全したりするなど鳥獣被害や外来種対策を行うことが多様性保全につながるの、そこも踏まえた表現としていきたい。丹沢のシカが象徴的だが、これまで考えもしなかったような生態系へのインパクトが起きている。

委員：3点ほど意見を出したい。みどり計画の後継計画ということを見ると一般市民がなかなか分かりづらい生物多様性だけではなく、都市の身近なみどりという視点も入れ込む必要があるのではないか。

本県の特徴として日本の縮図というようなスライドがあった。確かに自然もあり都市もあり、外来種や鳥獣被害の問題などがあるは分かるのだが、インパクトに欠け夢がない。守るという姿勢ではなく攻めの姿勢を表現してほしい。人と自然が一番せめぎ合っている場所だからこそ、そうした課題に対する答えを考えていかなければならないし、次の世界に向けてすごいことをやっているんだという表現にしていただけるとよいかと思う。

主流化、主流化と言われ続けている割には殆ど進んでいない。何故かを考えると、よいことが幾ら書かれていても自分の問題と認識されず、たらい回しにされているような現状があるのだと思う。基本理念等辺りに企業、市民、行政とそれぞれのステークホルダーがエリア毎にこうしたことに取り組むべきというような役割分担のマトリクスを入れてはどうかと思う。

委員長：生きものという視点で捉えると生きものが棲んでいる場所やみどりという意識が希薄になりがちだが、みどりという視点は重要だ。特に都市部では生きものがいる環境としては都市計画的に担保された公園や緑地等しかない。この点では緑の基本計画とどうリンクさせていくかということは非常に重要である。市町村の緑の基本計画とどう係れるのかをもっと言う必要がある。

夢は何かないですか。夢については今後の課題かなと思いますが、ステークホルダーについてはもっと人という観点から生物多様性との係りを踏まえたうえで考えることが大切かと思います。

委員：少し気になるのが基本理念の「いのちのにぎわい」という表現だ。個人的な捉え方だが、生物多様性の保全は安定した生態系を守るためかなと考えている。必ずしも生きものが沢山いればよいということではないように思う。淡水魚類を専門にしているが、本県の場合、元々淡水魚の種数は多くなく、それが本来の姿だ。そういう本来の姿をその場毎に保全、再生していくことが多様性保全なのではないか。にぎわいは表現として色々使われているが、共通認識を持ったほうがよいのではないかと思う。

委員：相模原の特徴として湧水が一つあるが、湧水環境の調査をしている市民グループの人たちがカゲロウ、トビケラ、カワゲラを合わせた種数（EPT種数）が低いと嘆いていたが、元々湧水はそうした環境である。にぎわいという言葉で種の数だけが一人歩きしないか気にはなっている。

委員長：一般的には種数が多いほど安定するから、にぎわいが使われてしまう。

委員：ハビタットのにぎわいなのだろうと思うが。

委員：ランドデザインのイメージについてもう少し説明がほしい。

事務局：広域的な視点で県域を眺めたときにみどりのあるべき姿を示せないかと考えているものである。

生物多様性に行政界は関係ないものの、市町村が策定する緑の基本計画の対象エリアは当該市町村内になるため、広域的な見地から生物多様性保全上、重要な場所を示すことが大切ではないかと考えており、こうしたマップをランドデザインという言葉で入れられないかという提案をしている。イメージはあくまでもイメージである。

委員：三浦半島に国営公園を誘致しようという動きがあると聞いたことがあるが、それは今どうなっているのか。

事務局：県の都市公園課が担当しているが、今でも地元の機運醸成を含め誘致活動を継続している。現状では非常に厳しいということを知っている。

事務局から生物多様性保全のランドデザイン作成に伴う評価手法について説明

委員：ランドデザインは 100 年とか長期を見据えたデザインだが、現状評価に近いものとしての説明だった。多様性保全上、重要な場所を残していくのは当たり前で、それ以外の部分をどうしていくのかということも整理されてのランドデザインではないか。

事務局：先ほど人口動態や鳥獣との関連での意見も出されていたが、確かに現状では今ある情報を活用して生物多様性評価のトライアルを行ったものであり、様々な観点から 100 年先を見据えたものとしてデザインされているかと言われればそうではない。

委員：先ほどみどりも含めた生物多様性として捉えるべきではないかと言ったが、人の暮らしの豊かさや幸せの評価軸とも合わせていかなないと誰も相手にしてくれないのではないか。この図は基礎データとしてはもちろん重要だが、ホットスポットばかりに目が行くような作りになっていると思う。

委員長：まずはランドデザインをどういうものとして使うかを整理する必要がありますので次回までに整理をお願いします。多様性による評価としてホットスポットが出てきているが、インパクトの話が出てきていない。大事な場所の話は出てきているが、そこにどういうインパクトがあるかという話がない。国家戦略では 4 つの危機として整理されているが、開発圧という点ではリニアや第二東名などの開発計画もある。一方で過疎化が進んでいる地域や外来種が蔓延している地域もある。ホットスポットだけでなく、インパクトのことも同時に考えないと保全はできないし、ランドデザインは描けないのではないかということ。

委員：道路を整備する際には周辺も含めて色々、環境調査が実施されるわけだけど、道路に面したところが商業施設になったり、水田耕作が放棄されたりする。インパクトは大事な視点で本県の場合、第二東名や圏央道沿いに物流施設ができて、かろうじて残されていた場所が喪失していく可能性もある。しばらくの間のインフラ整備がどうなっていくかを織り込んでいく必要があるのではないか。

また、自然保護協会のホットスポットマップ作成の中では沿岸域までは対象としているかと思うが、海のなかの話が出てこない。岩礁には岩礁の生きもの、砂浜には砂浜の生きものが生きているわけで本県は 2 方向を海に面し、東京湾、三浦半島、湘南海岸～小田原の海岸と特徴のある海があるわけでその辺も入れていきたい。

委員長：沿岸域の話は情報がないのと漁協との関係もあるのでずっと後回しにされているが、今回は海の専門家も入っているので入れていきたい。何がどうできるかは分からないけど、海の多様性が重要な資源であり、神奈川県にとって海は大切だと思います。

委員：国レベルでの取組も非常に遅れており、環境省の海産魚類のレッドリスト検討会が昨日、ようやく開催されたような状況で情報を整備する必要があると考える。

委員：陸域での評価は 3 次メッシュで行っているが、3 次メッシュによる解析に使えるデータも非常に限られており、生息地点が特定でき、県全体で情報取得が可能な植物とか昆虫とかのデータを用いて評価している。県戦略なので県全域が対象になると思うが、今あるデータでどの程度まで表現できるのか。

委員：内水面のほうは元々水産業が主眼にあったのでそうした調査は遅れていたが、この 15 年程度で漁業権とは関係ない河川については調査が進められてきており、事業も自然再生的なものにも予算が少しはつくようになった。量は無理だが、外来種も含めある程度は落とせる状況にはなっているかなと思う。

委員：海についてはレッドリストの考え方が陸とは異なり、定められたものがまだないものの湘南海岸の浸食の問題や羽田口の道路計画や八景島の先まで延ばそうとしている国道 357 号などインパクトはあり、考え方を整理しておく必要はあるのではないかと思う。

委員長：神奈川県には横須賀や観音崎に博物館もあるし、東大の油壺や JAMSTEC などもありと沢山の施設が集中している。神奈川県で海の生きものに係る情報がないと言われてしまうと日本全国どこにもないのではないか。海のことをきちんと考えた初めての県戦略になるかもしれないのではないか。

事務局：川や海については勝呂委員や工藤委員からも情報提供を受けながらやっているが、川についてはある程度網羅されつつあるものの、漁業権のある河川も含めて県内全域を網羅的、定量的に評価できるほどの情報という点では難しいように理解している。海については東大の油壺を含め色々情報収集したが、環境省の調査もスポット的にしか行われておらず定量的に評価できるようなデー

タは見つけられていない。重要海域については現在、環境省が取り組んでいるが、本県は東京湾の埋立地を除いては全域、重要海域として評価されているようである。工藤委員が調査された報告書等を見れば藻場として重要な場所はある程度は分かるが、全域の定量的な評価と言われるとなかなか難しい。

委員長：諦めないで意気込みを持ってもらえればと思う。

委員：額はともかく多様性保全に資する調査研究予算の確保についても検討していければと思う。

委員：「神奈川の鳥」の編纂作業に携わったが、鳥類では3次メッシュでの解析は無理であり、市町村界や政令指定都市の区界レベルだが、全県的な傾向については把握できる。また鳥類の場合、採集を伴わないということが特徴でもあり、植物等に比べ均一的に情報を収集することができるので5年スパンでの鳥の増減はかなりはっきり出てくるので時間軸を入れた解析ならば鳥類は使えるのではないか。

提言の冒頭で生態系サービスにも触れているが、生態系サービスの評価は相対的なものになる。つまり人口密度の高い都市部であれば距離感などのファクターが非常に重要になってくる。アプローチ手法としてはリモセンの世界になるかと思うが、同じ重要種のホットスポットでも都市部では相対的に高くなるように相対的なファクターがかかってくると思う。最近のリモセンは5次メッシュのレベルでやっていると思うのでそうした緻密な解析と広域的な鳥類のトレンド解析などをうまく合わせつつ柔軟に評価できればよいのではないかと思う。

委員長：他に意見等がないようであれば次回の進め方について説明いただきたい。

事務局：今回は5月頃を予定しているが、今日の委員会でも出された意見の整理等が一つ目の議題になると考える。また、色々と課題等が出されたが、その中でも重たいテーマはやはりランドデザインではないかと思うが、各委員から出された意見を踏まえて次回までにデザインを再提案することは無理なので一次戦略の中で目指すところ、届かないとすれば次のステップとして何を目指していくのか噛み分けながら整理していくことになるのではないかと考える。加えて、提言で整理された本県の5課題に対する取組の方向性の議論に入っていくことになるかと考えている。

委員長：ランドデザインという掴みづらい言葉を使わないで素直に何をやりたいのかを表現した言葉にすればよいのではないか。

以上